

若者環境の現状とその先の予測

東京電機大学中学校・高等学校教諭 金岡 克倫

若者環境の現状

「若者」という言葉に当てはまる姿を思い浮かべたとき、どのような形容をするであろうか。かつてであれば、おそらく「元気のよい」「希望」「楽しい」「やんちゃ」「積極的」「怖いもの知らず」など活力に溢れた言葉が羅列されるはずである。「若さがあれば、何でもできる」ともいわれるように、未来に向かって希望溢れる姿が連想されるのが普通であろう。しかし、長らく続くコロナ禍や、地域や家庭環境の変化に伴い、その若者像に変化が生じているのである。

若者の人間環境は、当事者以外、理解されがたいケースが多い。「私の若いころは」などと比較されてしまうのである。取り巻く構造は、かつてとは大きく違うという現状がありながら、その実態はあまり認知されていない。

若者環境の大部分を占めるのは学校である。しかし、新型コロナウイルス感染症の流行以来、学校の存在が保障されなくなってしまった。2020年春、戦後初となる全国一斉休校を経験した若者たちは、社会との断絶を経験せざるを得なくなった。その後、徐々に学校は再開されるものの、コロナ禍以前の生活に戻るまでは長い道のりである。修学旅行をはじめとする行事は中止となるか、「感染対策を徹底し実施」するゆえの窮屈な内容であった。日常生活の中でもマスクを着用し、表情を読み取る部分は以前と比べ格段に減った。一生に一度しかない学生時代であるにも関わらず、安全のために我慢をすることが当たり前となってしまっていた。

若者はマナーが悪いのであろうか

メディアでは、若者がやり玉にあげられる。「若者はマナーが悪い」とは、昔からよく言われることだ。しかし一方で、酒に酔い、千鳥足でマスクを着用せずに、大声を出し、駅で騒ぐ大人たちは散見される。少なくとも、小・中・高の学生においては、夜間に遊び歩くことも少なく、よほど大人よりもマナーがよいのではないか。それなのに彼らは、いわゆる大人たちが学生時代の記憶としてよく挙げる「楽しい出来事」を奪われてしまった。その不満や悲痛な気持ちは、SNSにて発信するか、友人同士で話すことぐらいでしか発散できない。自分勝手な大人の振舞いにより、不条理な苦しみを味わったとも言える。

一度奪われた時間は決して戻ってこない。大人たちが若かりし頃、当たり前のようであった青春と呼ばれるような記憶に残る快い日々を経験しないまま、現代の若者は大人になってしまうのである。その結果、未来を生きることに期待が持てなくなる。うつ傾向のある学生が増えてくる。自己の存在価値は、他者との交流によって生まれ、認識されるものである。人格形成においては10代の時期は非常に大きな意味を持つ。その貴重な時期に、他者との交流の機会を奪われてしまっているのだ。

SNSと若者

一方で、若者たちの間に普遍的に存在するのがSNSである。ほとんどの若者がスマートフォンを所持し、いつでもSNSの使用ができる世の中となった。手軽に連絡をすることができ、また情報の収集や発信も可能なSNSは、便利なコミュニケーションツールである。その反面、SNSには直接知り合ったわけではない人間との間でも、メッセージの受信や、やりとりが可能な側面もあり、正しく使わないと一部危険であることは誰もがわかっている。

「対面」も感染症予防の観点からは「危険」とされた時、大人たちはリモートワークに取り組んだ一方で、若者たちはコミュニケーションを取るためにSNSを活用した。SNSにおける仮想社会においては、自分と似た考え、同じような趣味・嗜好を持つ人間が集まる。すると、相手に対して共感できることが増え、心地よい空間となる。自分の居場所を求める若者は、SNSにのめり込むこともある。

自分が発信した投稿、もしくは自撮りと呼ばれる自分自身の姿に対して「いいね」ボタンをもらい、格好いい、可愛いなどと「褒められる」メッセージを受け取るとは、自己という存在を承認される行為に他ならない。たとえ、それがSNSで知り合った見ず知らずの相手であっても、である。SNSで自己承認を受けたことは「快」となり、相手に対しても快感情を抱く。その結果、危険性があるとは頭でわかっているながらも、見知らぬ相手と面会し、トラブルや事件の元となってしまう。

トラブルに巻き込まれることは運よく回避できたとしても、SNSでのやりとりの中では社会生活におけるスキル、特に対人スキルは育たない。SNSでは自分と似た趣味を持つ人間、考え方や物事の捉え方に共通点のある人間とのやりとりが中心となる。確かにその空間は居心地のよいものなのかもしれない。しかし実社会ではそうはいかない。様々な考え方に触れ、互いの違いを尊重しながらも、協同して物事に取り組む場面が圧倒的に多いからである。同質の人間との触れ合いにしか慣れていないことにより、コミュニケーション上の弊害が出てくる。互いの違いを尊重すること、異なる視点から出てくる発想を生かすこと、アイデアを持ち寄り、止揚へとつなげること、これらは実社会における問題解決や、新たなものを生み出す上で重要となってくるものである。若者たちがSNSに依存することで、社会における自己肯定感、社会的スキルの低下が見込まれる。しかし現代の環境は、SNSに依存しやすい構造を生み出している。

若者環境の厳しい現状

このように、若者環境は厳しい。にもかかわらず、その現状の認知度は高いとは言えない。彼らにとっての厳しい環境は、彼らにとっては当たり前であり、他の環境を知らぬがゆえに、当人たちは異変には気づきにくい。また、若者環境に存在する身近な大人である小・中・高の教職員は日々の業務に忙殺され、十分なケアを行いきにくい状況にもある。大学では一部を除き、事細かく日々の学生の様子を把握する、ということも考えにくい。また、保護者もコロナ禍による経済不況により、自分自身のことで手一杯であることが多い。

精神的充足、自己肯定感の不足は、学習意欲の低下を導く。また、自分と同質な人間を好んで接することにより、異質な価値観を認めることができず、生きてゆくにはただ何となく周囲に行動を合わせ、言うことを聞けばよい、という認識を持つようになる。その結果、創造性や批判的思考の欠如へとつながりかねない。そのような若者たちは、現代の社会に存在する様々な問題を解決する能力を有さず、新たな生きやすい社会の創造をすることが困難となってしまう。新たな物を創り出すよりも、何かに守られているということが優先になるのだ。

若者環境を向上させるための方法と展望

若者たちを闇に置いておかないためにも、早急に打てる対策もある。まず、人間関係を意図的に作り出すためにも、学校においては構成的グループエンカウンターと呼ばれるような、交流プログラムを行うことが良いであろう。社会人においても、アイスブレイクという名称で、このようなプログラムを行うことがある。これは「自然と」形成された人間関係ではないという反論もあるかもしれない。しかし、偶然のみによって得られた人間関係というのは、如何程存在するのであろうか。意図された環境の中で、育まれる人間関係の方が大半なのではないか。出会った人間同士が、互いを認め、共に時間を過ごし、心地よい記憶を共有することで、親しい間柄、信頼し合える関係へと昇華してゆくはずである。

このような交流プログラムに力を入れている自治体も増えており、「良好なコミュニケーションの取り方」やストレスマネジメントを学ぶ機会が増えている若者たちは、社会においても信頼し合える人間関係を構築できるはずである。最近の若者は力強さを感じにくい反面、十数年前ほど前の若者と比較すると、礼儀正しく、言葉遣いも丁寧であり、状況を把握することにも優れている。これは大きな強みである。教育現場が今後も人間関係の形成に力を入れれば、若者たちは社会においても自己肯定感を持ち、活躍できるのではないかと私は見ている。

また、若者環境＝学校と言ってもよいほど、若者たちにとって学びの場は重要だ。知識を得るという目的は、オンライン学習であっても達成され得る。しかし、人と人との交流により得られる自己肯定感の向上、精神的充足感は、オンライン上では十分に得ることはできない。国立成育医療研究センターが2020年11月～12月に行った調査【コロナ×こどもアンケート】によると、PHQ-A尺度における軽度以上のうつ症状を示した中学生・高校生は50%以上に達した。高校生に至っては3割が中等度以上のうつ症状を呈していた。一方、1年後の2021年12月に実施した同調査では、若干であるが精神的健康・自己肯定感の向上が見られた。私は現職の中高一貫校教員であり、その肌感覚ではあるが、2020年の一斉休校後の学生たちは大きな不安を抱え、ストレスや不眠を訴えることも少なからずあった。しかし、仲間と共に生活をしてゆく中で徐々に不安は癒えてゆく様子であった。仲間とともに学び、笑い合う経験が当たり前のように存在することが大切なのである。このことが広く認識された今、学校を閉じることはまず無くなり、若者たちは活気を取り戻しつつある。むしろ、

若者たちは仲間の重要性を強く認識したがゆえに、コロナ禍以前よりも人とのつながりを大切にしてくれよう。例えば、仲間とどこかに出かけた際、記念に写真を撮り、思い出としてその写真を仲間と共有する若者は増えた。これは人とのつながりや、仲間と過ごせた時間の有難みを感じている証拠ととれるのではないだろうか。充足感が高まり、見ず知らずの人に存在価値を認められる必要がなくなれば、SNSを介したトラブルも減る。希望的観測であるものの、人間関係を従前よりも大切にしながら、自己の存在価値を認め、肯定的に生きる若者は、今後数年間増え続けてゆくと信じている。

さらに、近年、地域のつながりは非常に希薄となっているが、自己肯定感の向上のためには、他者とのかかわりあい、そして自己を承認されることが必要であるがゆえに、今こそ地域のつながりを見直してみる時でもある。地域でのイベントや、共同作業の機会を増やし、様々な世代が交流できる環境を整えることで、地域のつながりは活性化してくる。

若者の今後 ー学校と地域ー

このように、これからの社会を築く若者たちは、大人たちが生きてきた環境とは異質な環境の中に育ち、人との交流を絶たれたことによる自己肯定感の低下が生じたことを、社会全体として受け止めることが必要である。その上で策を講じた先には、少なからず明るい変化が生じるはずである。

互いが良き理解者となり、信頼し合える人間関係を築けた若者たちは、自己肯定感を高め、新たなことにも挑戦する意欲が沸く。信頼し、相談できる人間が増えることで、うつ症状を示す若者も幾分減る。一人で抱え込んで回復に向けた治療も受けられない。精神的安定のみならず、適切な治療を受けることのできる若者も増えるのではないかと。

では、社会の創造という観点ではどうなのか。小・中・高等学校では新学習指導要領施行により、より学び合いが重視された学習内容となっている。意見を交わし、力を出し合い、協同して学ぶ機会が増えている。そのような学びをした学生たちは、大学での高等教育において、様々な問題を解決するためにより深く、より協同し、取り組むことができるだろう。言わずもがな、協同する場面が多ければ多いほど、人と人とのつながりは強固なものとなる。協同こそが、複数の人間が存在し、各々の個性や能力を発揮する社会を作り上げる唯一の方法なのだ。同質の考えを好む気質から脱却し、様々な価値観を認め合うことのできる若者たちは、今までにない観点における切り口を持ち、幸福度の高い、生きやすい社会の創造をしてくれるのではないだろうか。

それに加え、大人たちが若者環境の構造を意識しつつ若者を温かく見守り、地域における結びつきも強まれば、鬼に金棒である。地域にて若者と大人たちが交流し、協同しながら物事を創造する機会としては、祭やイベントの実施がある。もちろん、現在でもそのような地域での取り組みは行われているものの、都市部では特に、地域でのつながりが希薄となっている現状がある。地域を活性化するためのアイデアを、若者から募ることで今までにない観点から創造が進むかもしれない。大人が若者と結びつこうとすれば、地域が若者にとって

の居場所になるに違いない。例えば地域での居場所を見つけた若者たちが、その地域のイベントの告知や様子の発信などを、SNS を積極的に行う。特に現在の若者は、見た目が美しく、楽しそうな雰囲気のある写真を好み、その情報収集に対しても敏感である。すると、地域での活動に興味を持ち、人とのつながりの輪が広がり、自己肯定感の向上へとつながる。祭やイベントの成功の証として、その生き生きとした様子を写真や動画、メッセージなどで発信することは、地域の発展のみならず、若者自身の成功体験にもなる。そもそも、若者たちはイベントが好きであり、友人同士で遊びに行った日の出来事の発信は、現在でも盛んに行われている。しかし、今後はそれが現実世界での少人数のつながり+ネット上の大人数のつながりではなく、地域における発信に置き換わってくることで、真の精神的充足感に満ちた明るい雰囲気の投稿、発信が増えることが予想できる。

地域活動に興味はあるが、活動内容や、参加方法がわからない若者たちは、SNS で情報を得ることにより、参加しやすくなる。確かに、参加するのが「面倒くさい」と思っている層もいるだろうが、若者環境の主要なコミュニケーション手段である SNS で情報を得ることにより、楽しそうな活動であれば興味を持つことは自明の理だ。このように、地域を活性化させる必要性と人とのつながりを求める若者たちの現状が重なり、地域活動が盛んになり、若者たちは新たな居場所を作れるようになるだろう。SNS にて心配されるトラブルや犯罪に巻き込まれる可能性も、地域の大人という後ろ盾があることで、大幅に減るだろう。大人が若者を見守ることは、交流の場があることで初めて実現することである。つまり、大人が若者に歩み寄る行動をすることで、若者は安心できる環境を手に入れるのだ。

中高生が地域活動に参加しにくい要因としては、放課後や休日に学校の部活動に参加するという点も考えられる。仲間とのつながりという意味では部活動も大切なのであろうが、学校を卒業すると、そのコミュニティに参加することはできない。一方で、地域においては、年数に関係なく、場合によっては大人になっても所属することができる。現在、日本では部活動の地域移行が進められているが、報道では教職員の負担軽減の面ばかりが取り上げられている。教職員の労働環境改善は喫緊の課題であるが、それ以上に若者たちにとっては、地域活動に参加しやすくなるというメリットが大きい。地域の大人たちも、学校任せにしていたとも言える、若者の育成に取り掛かるようになるだろう。この、部活動の地域移行の動きも、地域における若者たちの居場所づくりに一役買うと見ている。

大人と若者が接する機会をさらに増えれば、若者たちが様々な価値観や経験に触れる中で、社会における自己価値を見出し、社会の発展に向けた行動ができるようになる。大人は若者環境における厄介者であってはいけない。本来、先導者であり、よき相談者であるのだ。世界の中でも労働時間が長く、精神的充足感を得にくい社会人たちも、若者と触れ合うことにより刺激を受け、柔軟な考え方に基づいた生き方ができるようになるはずである。

最後に

若者たちは社会の未来を担う、大切な存在である。若者環境の現状を認知することなく放っておけば、取返しのつかない闇時代が到来してしまうが、問題構造を認識し、社会に生きる大人たち一人ひとりが若者環境を温かく見守ることで社会全体に大きな光が差すだろう。また、若者環境に影を落とした新型コロナウイルス感染症の流行だが、歴史上終息しなかった感染症はない。諸悪の根源とも言える新型感染症流行は必ず終息する。コロナと共存しながらも、深い人間関係を築き、高い自己肯定感を持てるのだとするならば、アフターコロナの時代には、様々な制限や深慮の必要がなく、文字通り枠を通り超えた考え方、活動ができる。幸福な社会になるという予想が当たることを強く願いたい。

参考文献

国立研究開発法人国立成育医療研究センター（2020）「コロナ×こども本部 第4回【コロナ×こどもアンケート】 2020年11～12月実施」

国立研究開発法人国立成育医療研究センター（2021）「コロナ×こども本部第7回【コロナ×こどもアンケート】 2021年12月実施」

栗原慎二（2017）「マルチレベルアプローチ だれもが生きたくなる学校づくり」『日本版包括的生徒指導の理論と実践』

河越麻佑, 岡田みゆき（2015）「大学生の自己肯定感に及ぼす影響要因」『日本家政学会誌』Vol. 66 No. 5、pp. 222–233。